

の みず かく ほ 飲み水を確保!

埋め立て地や湿地が多かった江戸の町では、井戸水や川にも塩気がふくまれ、水をそのまま飲むことができなかった。江戸幕府にとって、飲料水の確保は、町づくりのために真っ先にしなければならないことだった。



<上・下水道の整備からはじめよう>

徳川家康は江戸に入城してすぐ、上水(水道)の整備を命じた。まず、現在の神田川の流れをつかって「神田上水」をつくり、人口が増えると、多摩川から水を引いて「玉川上水」をつかった。合わせて生活排水を流す下水道も、町中にはりめぐらせた。



神田川にかかっていた懸橋 懸橋は、地中の樋(水道管)を通ってきた上水を、神田川の上を通して向こう側に渡す、水道専用の橋だった。左奥に見える建物には、水の管理人が住んでいて、そこでうなぎ屋も開いていた。



現在の文京区関口にあった大洗堰 井の頭池を水源とする神田上水は、この堰で水の量を調節して、町中に配水された。上水は水戸藩の屋敷内を通り、東のはしから地下を流れるようにつくられた。



多摩川から43kmの大工事

1654(承応3)年、多摩川(当時、玉川)から四谷までの約43kmの水路を掘り、上水を引く工事を指揮したのは、庄右衛門と清右衛門の兄弟だった。完成した上水は玉川上水とよばれ、神田上水と合わせて、江戸の町の大部分にきれいな水を配水した。



弟よ、もうすぐ江戸だよ! 玉川上水をつかった玉川兄弟 玉川上水は、約8か月(旧暦)の短期間で完成した。2人にはほうびに、「玉川」の名字が与えられた。

もちろん上水はタダではありません。水道料金は「水銀」といいました。

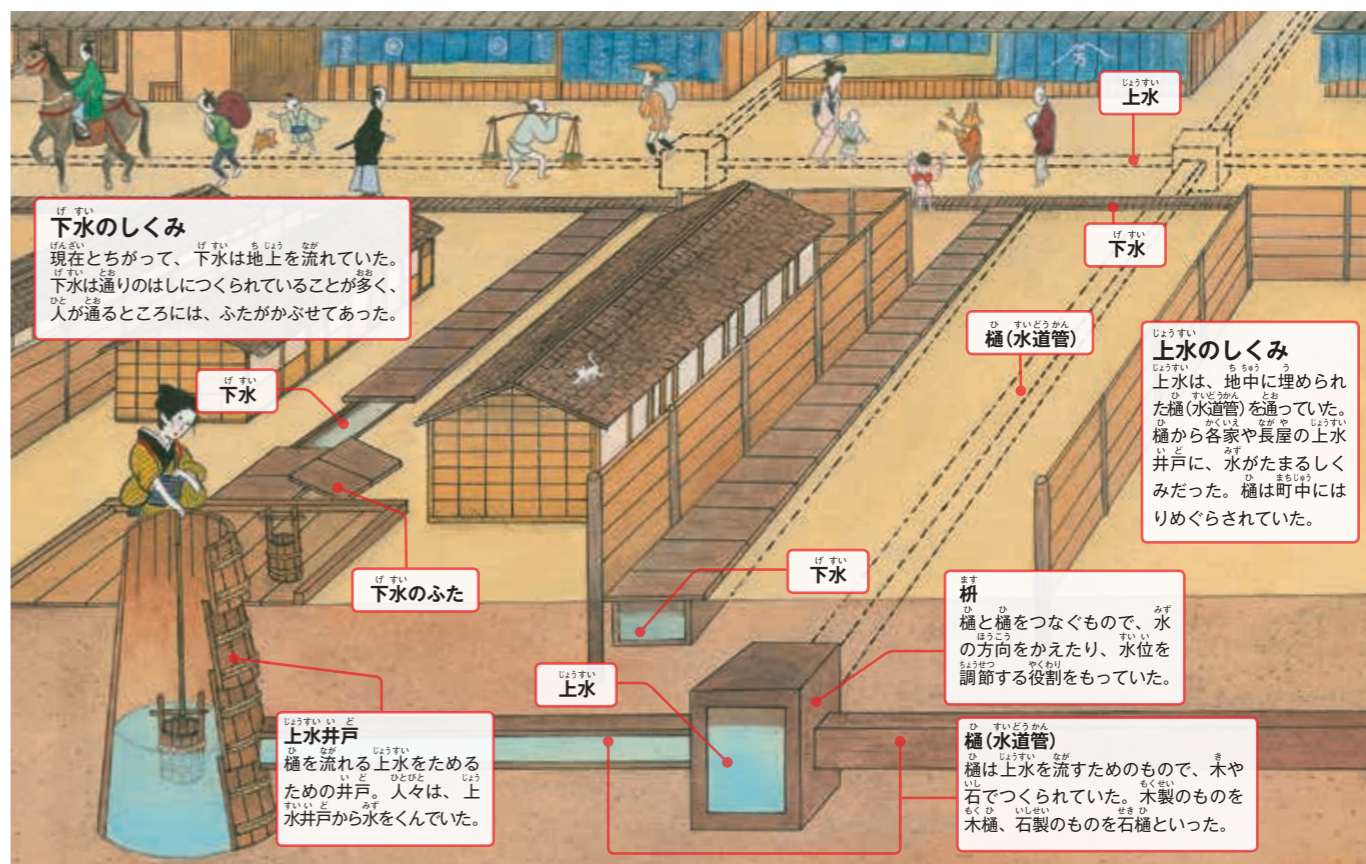


飲み水を買うだいな仕事だけど、水売りのもうけは少なかつたんです。

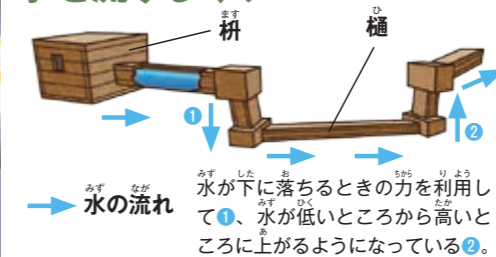
上水が届かない地域に水を運ぶ水屋

隅田川対岸(本所・深川など)には、上水が届かなかった。そこで、残った上水を放出している銭瓶橋付近などから、水船といわれる船に水を積んで運んだ。運ばれた上水は、水屋とよばれる水売りが売歩いた。

上水と下水は、町中をどんな風に通っていた?



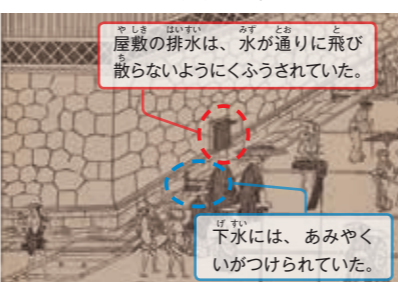
水を流すしくみ



江戸時代の水道管 上水は、木や石でできた樋(水道管)を通して配水された。樋と樋を拵(こしら)えて、水が流れる方向や水位を変えた。

下水は汚水ではなかった

江戸時代は洗ざいなどを使用しないため、下水はきれいだった。排水の過程で大きなごみは取り除かれ、大下水となり最後は海に流していた。また、し(し)ょう(排せつ物)や生ごみは、農家が肥料として買い取り、下水には流していなかった。



お金もちのものは、栄養まんてんて高い値段がついたんだ。



くみとり屋 し(し)ょうは、農作物の肥料として農家が買い取った。大根などの農作物と交換することもあった。

下水をろ過するくふう 下水には、とろとろ下水につけられたあみやく(あみやく)いがつけられていた。

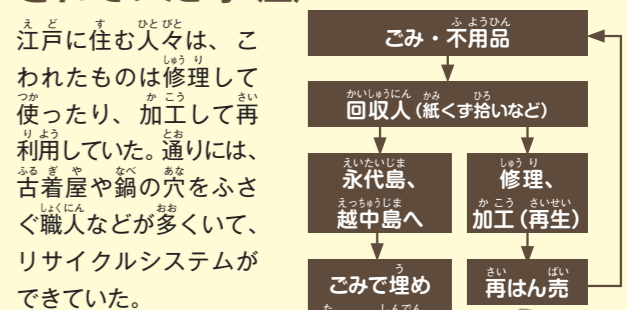
ローマ帝国の水道橋

樋と同じようなしくみでおし上げられた水が、橋のなかを通っている。



フランスの水道橋ポン・デュ・ガール

リサイクルシステムが整備されていた町・江戸



使用済みの紙は、買ったり拾ったりして、再生紙としてもう一度よみがえるんだよ。

